

解説

岡崎 弘樹



ナクバ直後にシリアに移り住んだパレスチナ人は推計七万五千人から十万人とされている。その多くは当初難民キャンプでの生活を

余儀なくされたが、一九五〇年代に入ると「アラブ民族主義」の国是の下でシリア政府の決定により、教育や就労面でほぼシリア人と同等の市民権が付与された。実態としてはシリア人の平均よりも貧富の格差やインフラの不整備が深刻であったとされるが、同時にシリアのパレスチナ人多数が教育に投資し一定の専門職層や有識者層を築いた面もあった。一九九〇年代後半以降には「記憶」を重要なテーマとしてつづぐダマスカスのローカルな出版社を活動拠点として、オーラル・ヒストリーの記述や小説の出版が相次いだ。シリア在住パレスチナ作家の作品は、依然として関心を共有する小さな読書サークルの限られた読み手しか獲得していない

が、彼らの独自の経験と感性を知る上で貴重な記録を残している。

アリー・クルディヤー (Ali Al-Kurdi) の自伝的小説『シヤマアーヤ邸 (Qasr Shamayya)』(二〇一〇年) もこうした作品の一つである。クルディヤーは一九五三年にダマスカスに生まれた。ダマスカス大学商学部を出て、ジャーナリストとして活躍した。パレスチナの文化や思想に関する著書を複数刊行しているが、小説に関しては一九九八年に短編小説集『鴨の列 (Mawkeb al-baiti al-barr)』を発表しており、本作は二作目となる。

クルディヤーの父親はナクバの際に独身者としてパレスチナ北部のサファドから、母親は当時の夫の殉難により幼子と胎児を抱えながらハイファ郊外からダマスカスに亡命した。連れ子の養育を条件に母親は再婚の申し出を受け入れ、その後作者たるアリーが生まれた。そして彼が実際に幼少期に過ごした空間こそ、ダマスカス旧市街ユダヤ人地区に存在した「シヤマアーヤ邸」であった。かつてのユダヤ人名士のアラブ様式の邸宅は、一九五〇年代前半までにユダヤ教徒住民の大量出国で空き家となり、ナクバを逃れてきたパレスチナ難民にあてがわれた。

今回、冒頭部分を翻訳したこの小説の魅力は、何と言ってもナクバで追われたパレスチナ人が、追い出した人々と同じ集団とみなされる

ユダヤ人の街区で暮らすという類例のない経験が描かれている点にある。一つの街区でともに暮らす隣人たちと親の故郷を奪った人々は果たして同じ「ユダヤ人」なのか。主人公は幼い頭を悩ませながらも、やがて自分が生活するシリア社会でさまざまな現実と直面する。国連パレスチナ難民救済事業機関 (UNRWA) 管理下の施設に食料物資を調達しに行く際の「惨めさ」や「恥ずかしさ」、シリア人同級生との喧嘩の際に突きつけられた水面下の差別意識など、「よそ者」故の疎外感の小説の冒頭に散りばめられている。

しかし、小説全体としてはその後の経験の方に重きが置かれている。主人公は家庭と街区、学校を行き来する中で極めて多様な人間関係を築き始める。保守的なムスリム家庭の息子である主人公にとって気心の知れた友人はキリスト教徒コミュニティ出身で聖職者の息子ジョルジュであったが、それに加えてアッシュリア人コミュニティ出身で画家志望のフアーズ、パレスチナ人同胞で祖国解放運動に熱心なアフマド、さらにユダヤ教徒コミュニティ出身のムーサーといった人物が次々と登場する。個人レベルでは人間的な友情を育み、思想を分かち合い、お互いの背景などすっかり忘れる瞬間が無数にある。だが、社会レベルでは差別する側と差別される側、あるいは加害者と被害者の関係性を意

識せざるを得ない緊張感は続いていく。

シリア社会との関係に留まらず、パレスチナ人社会内部の経験も多々描かれているが、特にパレスチナ人の母親像は注目に値する。かつてガッサン・カナファアーニーは『ウナム・サアド (Umm Sa'ad)』(一九六九年)で、義勇兵に参加した息子を誇りとする民族的抵抗のシンボルとして母親を描いた。『パレスチナII 母親II 抵抗』の連想はパレスチナ文学作品の多数にみられるが、『シャマアヤ邸』では母親たちがライフ・ステージ全体を通じて人生の荒波に「抗う」姿がとらえられる。主人公の母親は家族を経済的苦境から救い出す上で息子の中で最優秀である主人公をなんとか大学まで卒業させようと夢見続ける。またシャマアヤ邸に住んでいた明朗活発で主人公の憧れの存在であったラシャーは、サウジアラビア人との結婚を受け入れた後に人生の流転を経験し、最終的には米国に流れ着く。しかし、その後彼女の息子の一人はイスラーム主義者に、もう一人は米兵としてイラク戦争へ派遣されるという数奇な運命を辿ることになる。

小説全体から伝わるのは、ナクバから半世紀以上を経てパレスチナ人のアイデンティティがいかに複雑となっているかということである。ナクバ第二世代や第三世代は、祖国パレスチナと移住先のシリア、さまざまな宗教宗派コミュニティ

ニティ、さらにはアラブ地域と欧米社会といったさまざまな関係性の中で、多様で複合的、しかし極めて不安定で流動的な帰属意識に苛まれる。

それはパレスチナとシリアの間で長らく生きてきた作者クルディーの人生そのままでもある。パレスチナ人ジャーナリストとしてPFLP発行『ハダフ (Hadaf)』誌で長らく文化欄を担当したり、同組織のジョルジュ・ハバシユ代表がダマスカスに設立した「文化センター」で事務所長を務めたりしてきた。その一方で、学生時代にはシリアの民主化青年組織「共産主義行動連盟」に加わり一九八二年から一九九一年にかけて九年間にわたって収監され、悪名高いパルミラ監獄にも一時移送されている。二〇〇〇年代以降にはアルジャジーラ衛星放送のドキュメンタリー番組制作にもシナリオ・ライターとして多々関わってきた(たとえばアサド政権による過去の弾圧を描いた『カーキ色の記憶』(アルフォーズ・タンジユール監督、二〇一六年、二〇一七年山形国際ドキュメンタリー映画祭最優秀賞受賞)においてシナリオ担当して名を連ねている)。二〇一二年には戦火に見舞われたシリアを離れてベイルートに脱出した後、結局ドイツのワイマールに落ち着いた。結果としてではあるが、ホロコーストの犠牲者によって追い出され、シリアに身を落着

けた両親の息子が、その六十四年後にはシリアからも追放され、かつてのホロコーストの国に移り住んだことになる。

とはいえ、この小説は、歴史による翻弄のみを描いているわけではない。作品には同じ街区に住んでいたユダヤ教徒の隣人や仲間との思い出も散りばめられている。主人公の旧友ムーサーはシリアを離れて人生の紆余曲折を経た後に、シオニストとは区別される「アラブ系ユダヤ人」に関するドキュメンタリー制作に勤しむ。彼が告白するところによれば、シリアでの幼少時代やシャマアヤ邸に集ったかつての仲間との友情を決して忘れることはなかったという。それはすなわち、さまざまな宗教宗派の共存と友愛、寛容を歴史的に育んできたシリア社会の伝統と価値の再確認でもあったと言えるだろう。その意味で『シャマアヤ邸』が、パレスチナの文学であると同時にシリア社会の経験の中で生み出された文学であることは疑いない。